


→ 永久に「真」である命題「AはAである」

哲学の一分野である論理学

基本命題は「AはAである」

これは、「同一律を表現している命題」と呼ぶ



上記のような同一律を絶対的に「真だ」と述べた

アリストテレス



「Aは、 Aである」

哲学の一分野には、論理学がある。論理学の基本命題は「AはAである」だ。「A」のところには何を入れてもいいし、そして何を入れても、この命題は永久に「真」である。「偽」になることなど決していない。だが、その代わり、「A」という単語の繰り返しで、「A」の中身については何も語っていないのである。「Aは綺麗だ」とか、「Aは猫だ」と言ってはじめて、「A」についての中身の供述になるからである。

「AはAだ」命題でも、中身がある時もある。例えば「男は男だ（！）」「男は男だ（からねえ）」。威張っている男に水をかける女という、中身十分のドラマが成立する。もつとも、こうなるには、身振りとかイントネーションが不可欠だが……。

論理学の場合には、紙の上に何の表情もなく「男は男だ」と書かれているだけであり、無味乾燥、ドラマなど生まれようもない。

論理学上、このような命題を「同一律」を表現している命題と呼ぶのだが、「同一律」(P324参照)を絶対的に「真」だと最初に述べたのはアリストテレスだった。とはいえ、「同一律」を意識した哲学者は、彼が最初ではなかった。

